

## 研究論文

E. M. フォースターの『インドへの道』  
における一考察

小 西 弘 信

A Study of E. M. Forster's *A Passage to India*

Hironobu Konishi

## I

E. M. フォースター (E. M. Forster 1879-1970) の『インドへの道』(*A Passage to India*) は、1924年に出版された。本作品は、1910年に出版された前作品『ハワーズ・エンド』(*Howards End*) を書き終えてから十数年の歳月をかけて、書かれた小説である。執筆にそれだけの時間がかかったことについて、瀬尾裕は「おそらく東洋と西洋を、インド人とイギリス人、言いかえれば支配民族と被支配民族とをいかにしたら『結びつける』ことができるかという、きわめて解決困難な大問題にフォースターが取り組んだためだろうと思われる」<sup>1)</sup> と述べている。そして『インドへの道』はフォースターの最後の小説でもある。

本作品の舞台であるインドは、19世紀ヴィクトリア朝の大英帝国によって本格的に植民地化されていた。その経緯について、長島伸一は「1857年に、積年の圧制に対する『インド大反乱』(セボイの乱)が起き、一時は北インド全体に拡がったが、イギリスのインド支配は動かなかった。それどころか逆に、反乱が平定された翌年58年には、『インド統治法』が成立し、インド支配は東インド会社から、イギリス政府に移行することになった。これは『間接統治』から直轄地化への転換を意味するものであった」<sup>2)</sup> と述べている。圧倒的な軍事力をもったイギリスには、インドも他のアジア諸国と同様に抵抗できなかったのである。

そしてイギリスのインド直接統治には、1858年にイギリス本国にもインド省が設立され、ヴィクトリア女王の名代として派遣される総督(副王)が実際の統治にあたった<sup>3)</sup>。秋田茂は「植民地統治に伴う『本国費』(軍事費・官僚の給与や年金を含む行政費、鉄道資材などの備品購入費及び各種の利子支払い)が毎年自動的にインド財政から支払われる財政的収奪が行われ、ジェントルマンの次三男が高級官僚

や軍の将校として現地に赴任していた」<sup>4)</sup>と述べている。彼らがインドにおける支配階級を形成した。

ではフォースターは、大英帝国のインド植民地化をどのように見ていたか。それは批判的であった。彼は1926年1月の*The Atlantic Monthly*に掲載したエッセイ「イギリス国民性に関する覚書」(“Notes on the English Character”)の最後にイギリス人がインドでひき起こしたアムリツァ (=アムリトサル)の虐殺に触れている。その出来事は、戒厳令下に行われたイギリス軍による丸腰のインド民間人に対する無差別攻撃だった<sup>5)</sup>。

フォースターにはインド人の親友がいて、インドを訪問していた<sup>6)</sup>。このフォースターの個人的な事情も、彼がインド寄りの立場になっている要因だろう。文学的な面から、19世紀は、産業主義と唯物主義、あるいはデモクラシーを背景とするリアリズムが、前世紀のロマンティズムにとってかわった時代でもあった<sup>7)</sup>。この時代の変化に、彼はうんざりしたことも、彼が帝国主義を嫌悪することにつながっているだろう。

『インドへの道』は、先述のようにフォースターの最後の小説であり、彼はその舞台にインドを選んだ。彼が『インドへの道』を創作した意図とは何だろうか。

これまで述べてきた19世紀の時代やイギリスとインドとの関係を考えると、フォースターが、個人的なインド体験からも植民地において支配者と被支配者を産出した帝国主義に対して政治的に批判するために、『インドへの道』を書いたと推測できないだろうか。ところでそういう考えとは違って、『インドへの道』の特色を荒正人は以下のように述べている。

この長編の真の特色は、E. M. フォースターの芸術観に求めなければならぬ。それは、存在の調和という理念であろう。かれは、人間を分裂させる、階級、習慣、時代、信条、人種などの差異を余り深刻なものと考えないで、それらがいつかは消滅するだろうと望んでいる<sup>8)</sup>。

荒は『インドへの道』においてフォースターの辿りついた芸術観に注目し、彼の創作の意図に、先述の帝国主義批判のような政治的な事情をあまり重視していないようである。荒が指摘するように確かにフォースターはその芸術観は持っていただろうが、大英帝国を通して、帝国主義という負の遺産である植民地化によって生じた民族・人種差別を描くことで、イギリス人にやはり後悔と反省を促そうとしたことは、否めないのではないだろうか。彼が生涯の中で親しくなったインド人との出会いを通して、彼が理想とした、民族・人種を超える人と人とを結びつけるものとは何かを世に問おうとしたのではないか。唯一の意図だけでなく、複数の意図を

持って、世界中の人々の共感が得られることを想定しながら、フォースターは『インドへの道』を創作したのではないかと仮定したい。

フォースターが、19世紀のイギリスとインドにおける、倫理的にも、政治的にもデリケートなテーマに向かって、微に入り細に入り言葉を選びながら、『インドへの道』の完成まで運んだことは想像に難くない。そのように考えれば、瀬尾が述べるように前作品『ハワーズ・エンド』と『インドへの道』との出版の時間的な開きがあったことは納得できる。

本研究は、フォースターの『インドへの道』を通して、彼の最後の小説の創作の意図を探求するものである。また、彼がインドと出会ったことの意味も考えるものである。

## II

『インドへの道』の構成は、それぞれが象徴的なタイトルを持つ3つの部分からなる。第1部「回教寺院」(Mosque)、第2部「洞窟」(Caves)、第3部「神殿」(Temple)である。各部のタイトルが象徴的なのは、登場人物たちが出会い、出来事が起きる重要なきっかけになっている場所を象徴しているからである。ここでは、各部のタイトルに沿って、主要な登場人物間の印象的な出会いと出来事に焦点当て考察する。

まず、第1部の「回教寺院」は、イギリス老婦人ミセス・ムア (Mrs Moore) が、インド人医師アジズ (Aziz) と初めて出会う場所である。アジズは回教徒である。以下は二人が出会う場面である。

Another pillar moved, a third, and then an Englishwoman stepped out into the moonlight. Suddenly he was furiously angry and shouted; 'Madam! Madam! Madam!'

'Oh! Oh!' the woman gasped.

'Madam, this is a mosque, you have no right here at all; you should have taken off your shoes; this is a holy place for Moslems.'

'I have taken them off.'

'You have?'

'I left them at the entrance.'

'Then I ask your pardon.'

Still startled, the woman moved out, keeping the ablution-tank between them. He called after her, 'I am truly sorry for speaking.'

'Yes, I was right, was I not? If I removed my shoes, I am allowed?'

'Of course, but so few ladies take the trouble, especially if thinking no one is there to see.'

'That makes no difference. God is here.'

'Madam!'

'Please let me go.' (38-39)<sup>9)</sup>

アジズは、ミセス・ムアに、“Madam, this is a mosque, you have no right here at all; you should have taken off your shoes; this is a holy place for Moslems.”（「ここはモスクです。ここに入る権利はあなたにはない。靴を履いたままではいけませんぞ。ここは回教徒の神聖な場所なのです」<sup>10)</sup>）と言い、彼女は靴は脱いでいると答える。さらに彼の“so few ladies take the trouble, especially if thinking no one is there to see.”（「誰も見ていなかったら、わざわざ靴を脱ぐ婦人はほとんどいない」）には、彼女は、寺院に神の存在を認め、異教の神でも、その神に対して、外から来たものとしての礼儀をわきまえた行動をとるのである。こうした彼女の言動に対してアジズはすぐに好感を持つ。

フォースターは、ミセス・ムアに、当時のインドにいたイギリス人女性とは違った雰囲気を持たせている。ところで彼女がインドまでやってきた経緯は、彼女の息子ロニー・ヒースロップ（Ronny Heaslop）に頼まれて、彼の婚約者アデラ・クウェステッド（Adela Quested）を連れてイギリスから船と汽車を乗り継いでインドのチャンドラポア（Chandrapore）にやってきたのである。彼女の息子はチャンドラポアの治安判事をしている。彼はリアリストであり、母親の日常会話に彼女がしばしば神様を持ち出すことに辟易している。

ミセス・ムアに同行したアデラは当地のイギリス人クラブの排他的なしきたりに批判的な誠実で不器量な娘として描かれている。彼女もインドのイギリス人女性と違って、彼女の名クウェステッド（好奇心）の通り、インドに興味を持ち、その真の姿を知りたいと願う女性である。彼女の“I want to see the *real* India”（「本もののインドを知りたい」）という言葉は、ミセス・ムアとイギリス人クラブに行った場面に出てくる。

... One electric fan revolved like a wounded bird, another was out of order. Disinclined to return to the audience, she [Mrs Moore] went into the billiard-room, where she was greeted by 'I want to see the *real* India,' and her appropriate life came back with a rush. This was Adela Quested, the queer, cautious girl.... (42)

アデラの好奇心からの願いは、チャンドラポアの官立大学で学長をしているシリル・

フィールディング (Cyril Fielding) のお茶会の招待を介して、同大学の哲学教授ナラヤン・ゴドボール (Narayan Godbole) やアジズとの出会いにつながり、ここで主要な登場人物であるフィールディング、アジズ、アデラ、ミセス・ムア、ゴドボールが揃うことになる。そして彼らは互いに好感を持った関係を結んでいく。ここでアジズからマラバール洞窟 (Marabar Caves) のピクニックの誘いがかかり、彼らはあまり乗り気ではなかったが行くことを承諾する。この出会いは第2部「洞窟」でのクライマックスとなる大惨事につながっていく。

次に、第2部では、マラバール洞窟のピクニックとそのことによって起こる大惨事が描かれる。アジズの手配で、アデラ、ミセス・ムア、フィールディング、ゴドボールはマラバール洞窟に行くことを決める。しかし実際には、フィールディングとゴドボールは汽車に乗り遅れて、アジズが従者を伴ってアデラ、ミセス・ムアを連れて洞窟に向かうのである。到着したマラバールの洞窟口で、ミセス・ムアは閉所恐怖症を起こし、先へ進むことを断念する。さらに奥の洞窟群には、彼女を残して、アデラとアジズが従者を一人伴って向かうことになる。

そして、『インドへの道』のクライマックスの始まりとなる事件がアデラとアジズとの間に起きてしまう。アジズが場を離れたすきにアデラは、洞窟の一つに一人で向かってしまい、その中で精神錯乱を起こし、洞窟群のある丘陵から一人で下りてしまうのである。しかも彼女は下山の最中にサボテンで怪我をしてしまう。降りたところに、ちょうど通りがかったイギリス婦人の車に遭遇し、婦人に助けられて彼女の車でチャンドラポアに帰ってしまう。そこから事態は思わぬ方向へと展開し、チャンドラポアに戻ったアデラは洞窟でアジズに襲われた、と彼を告発し、裁判が開かれることになる。ここからフィールディング、アジズ、アデラの関係が非常に緊張した暗転へと向かってゆくのである。

さらに、アデラとアジズの事件は多くのインド人とインドのイギリス人を巻き込んで、両者間に激しい対立をひき起こす。Iで当時のイギリスとインドとの状況を述べたように、両者は対立し、その対立は感情に訴えるほどの根深いものになっていた。インドにおける両者には既に一触即発的な前提があったことは容易に推測できる。

アデラとアジズと共にピクニックに行ったミセス・ムアは、ロニーにアジズの無罪を伝えながらも、裁判で証人になることを断り、帰国することを告げる。そして、帰国の船上で心臓発作を起こして亡くなる。フィールディングはアジズの無罪を信じ、これまでと変わりなく彼に寄り添おうと努める。そのためにイギリス人たちから孤立した彼はイギリス人クラブを退会する。以下は彼がクラブから出ていく場面である。

Fielding moved towards the door.

‘One moment, Mr Fielding. You are not to go yet, please. Before you leave the

Club, from which you do very well to resign, you will express some destination of the crime, and you will apologize to Mr Heaslop.'

'Are you speaking to me officially, sir?'

The Collector, who never spoke otherwise, was so infuriated that he lost his head. He cried: 'Leave this room at once, and I deeply regret that I demeaned myself by meeting you at the station. You have sunk to the level of your associates; you are weak, weak, that is what is wrong with you—'

'I want to leave the room, but cannot while this gentleman prevents me,' said Fielding lightly; the subaltern had got across his path. (178-79)

クラブから出ていこうとするフィールディングに、チャンドラポアを統治している州長官のタートン (Turton) は "You have sunk to the level of your associates; you are weak, weak, that is what is wrong with you—" (「インド人なんかとつき合っているからそんな低級な人間になるのだ。君は弱い、弱い。それが君の欠点なのだ…」) と言葉を浴びせる。しかし、フィールディングは、皮肉を交えて邪魔されてここから出られないと "lightly" (「平然」) と言い返すのである。彼がクラブから出ていくことは大英帝国との決別を意味することになる。この平然と言い返す彼の姿に読者は清々しさを感じるだろう。フィールディングはフォースター自身と考えてよく、彼の大英帝国の悪しき面との決別の意思が伺えるようである。

アデラとアジズが起こした事件によって、フィールディングとアジズとの友情にも亀裂が入る。彼はアジズを見捨てるつもりは全くなかったが、アジズに、彼の想いは伝わらなかった。というのも、アジズはフィールディングとアデラが恋愛しているという噂に苛まれ、彼に出会っても、かつてのような態度は取れなかったからである。第2部の結末は、アデラとアジズ、アジズとフィールディングの間の友情がこのように崩壊し、アデラとフィールディングもインドを去ることになる。

ここで、主要な登場人物の残りの一人であるゴドボールの役割について考えてみたい。アジズとアデラの裁判の前に、ゴドボールは私用でフィールディングを訪ねる。事件と裁判に関して、彼はフィールディングから意見を求められるが、その件は回答しようがないと答える。なおも、引き下がらないフィールディングに、ゴドボールは以下の言葉で自分の考えを述べる。

'No, not exactly, please, according to our philosophy. Because nothing can be performed in isolation. All perform a good action, when one is performed, and when an evil action is performed, all perform it. To illustrate my meaning, let me take the case in point as an example. I am informed that an evil action was performed

in Maraba Hills, and that a highly esteemed English lady is now seriously ill in consequence. My answer to that is this: that action was performed by Dr Aziz.' He stopped and sucked in his cheeks. 'It was performed by the guide.' He stopped again. 'It was performed by you.' Now he had an air of daring and coyness. 'It was performed by me.' He looked shyly down the sleeve of his own coat. 'And by my students. It was even performed by the lady herself. When evil occurs, it expresses the whole of the universe. Similarly when good occurs.' (169)

事件と裁判に関して、ゴドボールは、宗教的な観点から自分の考えをフィールディングに伝える。ここはフォースターがヒンズー教の哲学を披露してくれている<sup>11)</sup>。ゴドボールは、関わるすべてに原因があり結果として起きているのだ、と言う。ヒンズー教における「善因善果、悪因悪果」という「縁起」の思想である。ヒンズー教によってゴドボールの言動は常に落ち着いていて、醸し出す雰囲気は神秘的である。また彼の神秘的な存在は、『インドへの道』を第3部につなげて行くためには重要なのである。

第3部は「神殿」である。マラバール洞窟の事件から2年後に時間設定され、ゴドボールの登場とヒンズー教の大祭の場面から始まる。彼はチャンドラボを離れ、マウ王国の文部大臣になっており、その大祭を司る。そして祭りの最中の祈りによって法悦の中にいる彼は故ミセス・ムアの魂を感じ、神秘的な出会い方をする。以下はゴドボールが彼女の魂に出会う場面である。

Covered with grease and dust, Professor Godbole had once more developed the life of his spirit. He had, with increasing vividness, again seen Mrs Moore, and round her faintly clinging forms of trouble. He was a Brahman, she Christian, but it made no difference, it made no difference whether she was a trick of his memory, or a telepathic appeal. It was his duty, as it was his desire, to place himself in the position of the God and to love her, and to place himself in her position and to say to the God, 'Come, come, come, come.' (262-63)

ゴドボールは最初おぼろげに、最後ははっきりと彼女の魂を認識し、宗教を超えて、彼女の魂をヒンズー教の神に委ねるのである。この魂レベルの二人の再会については、ヒンズー教徒の彼が異教徒の彼女を迎え入れていることが重要であろう。この場面抜きには、その後のフィールディング、アジズ、アデラの関係の修復は考えられないからである。各人の個人的な経緯を超えて各人が融合できるのは、こうした神秘的な力によるしかないことを、フォースターは示唆したかったのではないだろうか。

第3部はヒンズー教が全体のトーンを支配しているように見え、第1部や第2部に比べて小説のページ数が少ない。各部間の量的な比較について、川口能久は「第3部は第1部、第2部と比べて量的に少なく、ブリッジパーティ、マラバー洞窟の事件、そしてそれに続く裁判などに匹敵するような出来事や事件は起こらない。第3部は『アンチ・クライマックス』『付け足し』とさへ感じられるのであり、また第3部は第2部までのプロットとは直接的には結びつかない」<sup>12)</sup>と指摘している。しかし第3部は本作品には不可欠なのである。

第3部では、フィールディングとアジズとの再会が用意されている。ゴドボールの計らいによって、アジズはマウ国の王の侍医になっていた。アジズがこの地に移った理由は、あの忌まわしい出来事があったチャンドラボから離れたかったからである。フィールディングは僻地の諸州の英語教育を視察する公的な役割をもってインドに戻ってきていた。そして、二人の出会いを用意することになるのは、ゴドボールである。ヒンズー教の大祭において二人は会うことになる。以下は大祭でゴドボールを通して、アジズはフィールディングが来ていることを知る場面である。

‘Hullo!’ he [Aziz] called, and it was the wrong remark, for the devotee indicated by circular gestures of his [Godbole’s] arms that he did not desire to be disturbed. He added, ‘Sorry,’ which was right, for Godbole twisted his head till it didn’t belong to his body, and said in a strained voice that had no connection with his mind: ‘He arrived at the European Guest House perhaps—at least possibly.’

‘Did he? Since when?’

But time was definite. He waved his arm more dimly and disappeared. Aziz knew who ‘he’ was—Filding.... (264)

二人は再会し、アジズがフィールディングに対する誤解を解いたこと、ミセス・ムアの子供たちに会うことで、二人の間の険悪な雰囲気は解消される。しかし、『インドへの道』は二人の別離で終わる。それは、彼らがそうなる運命にあったように、『インドへの道』は結末を迎える。フォースターはこのようなペシミスティックな終わり方を選んだのである。

### III

ここでは、フォースターの『インドへの道』の創作の意図について考えてみたい。『インドへの道』には、大英帝国下のインドでのイギリス人とインド人との対立が描かれ、その対立は長く激しいものであることが分かる。しかも、インドでは既に



インド人の中でも民族の相違、宗教の相違、政治問題などが複雑に絡まっている背景があり、『インドへの道』では植民地に駐在するイギリス人の状況も加わって、新たに複雑な人間関係が生じ、彼らの間で様々な衝突や対立がひき起こされる事件が起きてきたことは容易に想像できる。当時のインド人とイギリス人が共存することには、支配と被支配という関係ゆえに差別が生まれ、心理的にも対立があったことも想定できる。長崎勇一は「合理的で分析的な西洋的思想と、非合理の直感と包括性に立つインド的な理想とが対照される」<sup>13)</sup>とインドにおける文化的な対立にも言及している。

そうした対立や衝突がありながらも、『インドへの道』に、フォースターは対立し合う者、融和し合う者、対立も融和もしない者を登場人物として配置させているようである。

上記を踏まえると、登場人物は、「インド人を嫌悪するイギリス人」、「イギリス人を嫌悪するインド人」、「融和に努めようとするイギリス人及びインド人」、「国籍的な観念から超越したイギリス人及びインド人」と分けてみることができる。「インド人を嫌悪するイギリス人」としてタートン夫妻やロニー、「イギリス人を嫌悪するインド人」として弁護士ハミドゥラ（Hamidullah）やマームード・アリ（Mahmoud Ali）、「国籍的な観念から超越したイギリス人及びインド人」としてミセス・ムアやゴドボールが該当するだろう。

では、「融和を試みようとするイギリス人及びインド人」とは誰か。フィールディング、アジズ、アデラである。彼らの言動には、紆余曲折あれども国籍を超えて、人として触れ合おうと努めていることが感じられるからだ。

ここで考えなくてはならないことだが、タートン、ハミドゥラ、ゴドボールは、自身の職業や信念に従い、『インドへの道』の中で彼らの言動は一貫している。一方、フィールディングやアジズらは、自由人であり、彼らの言動は一貫しているとは言えない。また彼らの友情も永続するという保証はなく、いつ崩壊するか分らないのである。逆に両国の関係を悪化させ、友情の構築は失敗する可能性もあるのである。マラバー洞窟の事件こそ、その失敗だったである。

では何が、彼らの友情の構築を妨げるのだろうか。それは各人の背景にあるものだろう。各人の背景にあるものとは、国籍、風土、伝統、文化などが挙げられるだろう。それらが潜在的に彼らを操ってしまうのである。彼らはそこから自由になろうとしても難しいのである。

例えば、マラバー洞窟のピクニックにおける、アデラとミセス・ムアの言動を挙げてみる。自身の結婚に悩んでいたアデラはアジズにインド人の結婚観について興味本位で尋ねてしまう。この質問に彼は不快感を抱くのである。彼の不快感とはインド人としての伝統や文化から由来する侮辱感である。

Probably this man [Aziz] had several wives—Mohammedans always insist on their full four, according to Mrs Turton. And, having no one else to speak to on that eternal rock, she [Adela] gave rein to the subject of marriage and said in her honest, decent, inquisitive way: 'Have you one wife or more than one?'

The question shocked the young man very much. It challenged a new conviction of his community, and new convictions are more sensitive than old. If she had said, 'Do you worship one god or several?' he would not have objected. But to ask an educated Indian Moslem how many wives he has—appalling, hideous! He was in trouble how to conceal his confusion. (148-49)

アデラは興味本位の浅はかな質問をしたのではあるが、彼女には罪悪感はないのである。というのも、彼女は伝統や文化には無頓着だっただろうし、インド初訪問の彼女には限られた（もしかしたら誤った）知識しか持ち合わせてなかったからである。これを機にアジズとアデラの友情は崩壊してゆく。

アデラに同行したミセス・ムアはどうだろうか。普段から彼女はインドの土地や人々に精神的に交わろうとし、アデラとは違うその後の人生の展開を迎えるのである。ミセス・ムアは最初の洞窟の中で、持病の閉所恐怖症によって精神錯乱を起こすが、そのことである種の悟りを得るのである。彼女は、他の登場人物から距離を置く存在になる。彼女はアデラやアジズと一緒に洞窟に行かなかったおかげで、マラバール洞窟の事件の直接的な関与は免れる。次に、アジズの無実をロニーには伝えながらも、彼女は帰国を考え、裁判所に行かないことで、事件との関係を断つのである。他の登場人物から距離をとる姿勢はゴドボールに似ている。

帰国を実行したミセス・ムアはチャンドラボからも、さらにインドからも離れていく。しかも彼女は帰路の船上で亡くなることで、この世からも離れていくのである。そうした過程を経て彼女は神秘的な存在になっていく。ここにフォースターの意図的なものが感じられる。彼は『インドへの道』に特別な役割を持った存在としてミセス・ムアを置いたのではないだろうか。ミセス・ムアに関してウォルター・アレン (Walter Allen) は以下のように述べる。

But on the other plane on which *A Passage to India* exists this conclusion is contradicted. Reconciliation is possible; and it comes about through the figure of Mrs Moore, the old English lady on whom India has such a strange effect and who becomes, after she leaves India to die on the voyage home, almost a local goddess. She is not presented as an especially remarkable old lady; but she has her moments of perception, she expresses Forster's own awareness of the nature of

things; and when Adela at the trial suddenly perceives reality and knows that whatever did happen in the Caves—and that we never know—certainly Aziz didn't assault her, it is, as it were, through Mrs Moore's eyes that she sees.<sup>14)</sup>

マラバー洞窟事件後の裁判でのアジズとアデラの対立は、二人の個人間において、さらにイギリスとインドの国際間において、最悪の状況を生み出していった。しかし、フォースターはミセス・ムアを用いることで予期されうる最悪の状況を回避させるのである。アレンが述べる“*But on the other plane on which A Passage to India exists this conclusion is contradicted*”（「しかし、*A Passage to India*を支えるもう一つの面において、この結論は反駁されるのである」）とは、法廷におけるアデラの突然の覚醒によって、イギリス人とインド人間の国際的な最悪の状況は回避できなかったが、この後のアデラ、フィールディング、アジズの関係においては最悪の状況を回避できたのである。裁判所の内外にいる多くのインド人が、証人としてミセス・ムアを呼び出させたいと「ミセス・ムア」と連呼するが、その声がいつの間にか「エスミス・エスムーワ」（Esmis Esmoor）という唱和に変わり、あたかもその唱和は神々を招来する宗教的なチャントに似て神秘的な雰囲気をもその場に作り出すのである。その唱和の中でアデラの覚醒は起きるのである。

覚醒したアデラは、事件の真実を打ち明けアジズの告訴は取り下げられる。裁判が終わり、裁判所を出たところで、彼女はフィールディングに見つけられ助けられ、裁判中にはこだまによって生じていた精神錯乱からも助け出されるのである。やっと彼女もミセス・ムアとは違う人生の展開で、一切から離れた存在になれたのである。裁判が終了してから後に、不思議なことにヒンズー教徒と回教徒との協調も起こるのである。これも読者にミセス・ムアが神秘的な存在になったおかげのように感じさせる。

第3部では、故ミセス・ムアはゴドボールの祈りの中に神秘的に現われ、フィールディングと彼の妻（ミセス・ムアの娘ステラ）とがアジズに会うところで、アジズの心にミセス・ムアを想起させることで現われる。このようにミセス・ムアの実在は直接的に間接的に読者には感じられるように仕組まれているようだ。ミセス・ムアについて、川口は「彼女はいわば作品全体を支配する女神のような存在であり、全編を通して存在することによって作品に統一性をもたらしめているのである」<sup>15)</sup>と述べ、フォースターが特別な存在としてミセス・ムアに神秘的な役割を与えた意図が分かる。

ここで、ミセス・ムアに関連して「神秘」について考えてみる。第1部にアデラ、アジズ、フィールディング、ミセス・ムアのお茶会において、彼らが「神秘」を話題にしている箇所が見つけられる。

‘I do so hate mysteries,’ Adela announced.

‘We English do.’

‘I dislike them not because I’m English, but from my own personal point of view,’ she corrected.

‘I like mysteries but I rather dislike muddles,’ said Mrs Moore.

‘A mystery is a muddle.’

‘Oh, do you think so, Mr Fielding?’

‘A mystery is only a high-sounding term for a muddle. No advantage in stirring it up, in either case. Aziz and I know well that India’s a muddle.’

‘India’s—oh, what an alarming idea!’ (79)

ミセス・ムアが“I like mysteries but I rather dislike muddles”（「私は神秘的なものは好きだが、混沌は嫌いだ」）と言うと、フィールディングは“A mystery is a muddle.”（「神秘は混沌だ」）と彼女に言葉を返す。彼の「神秘は混沌だ」とは、彼がこれまでに受けたインドの印象、すなわち、理解できない、受け入れ難い、目を背けたいくなるインドを踏まえたものであろう。

この登場人物達の何気ない会話の中に出てきた「神秘は混沌だ」という台詞は、『インドへの道』のキーフレーズであろう。その後の出来事の中に読者は「神秘」や「混沌」を感じるからである。マルバーラ洞窟の中で、ミセス・ムアの閉所恐怖症による精神錯乱とアデラが起こす精神錯乱は「混沌」である。続いて洞窟でのミセス・ムアの悟りと法廷でのアデラの覚醒は「神秘」である。『インドへの道』の神秘と混沌に関して、寺本明子は「フォースターは確かに『混沌』の中に存在する神秘の力をここで肯定しているように思われる」<sup>16)</sup>と述べている。またフォースターと神秘性について、中橋一夫は「彼のうちには日常的な現象の背後に探求の針を進めてゆく哲学的な神秘的傾向がある」<sup>17)</sup>と指摘している。フォースターは神秘を重視しているようだ。

では、なぜフォースターは『インドへの道』の中に「神秘」を取り入れたのか。その神秘性にこそ複雑な問題の解決の道があると考えたからではないだろうか。彼がインド人の友人を介してインドの国や文化を知り、自身のインド滞在中で神秘も実感したのではないだろうか。そして彼はヒンズー教を知り、同宗教には分断されたものを包括する力があると感じたからではないだろうか。『インドへの道』でのヒンズー教的な考え方は直接的にゴドボールの言葉や間接的にミセス・ムアという言葉に表れているように感じる。

最後にフィールディングのことを考えてみたい。彼はインド人に積極的に触れ合うことを常にしてきた人物だが、アジズと真の友情を構築することは結局できなかった

た。『インドへの道』の最後には、マウ国でアジズとフィールディングは再会し、ネイティヴ・ステートで馬の背にまたがって会話する場面がある。アジズはフィールディングにインド人が幾千年かけてもこの国からイギリス人を追い出すことができたなら、あなたとは友達になれるだろうと告げる。一方フィールディングは愛情込めてアジズに友人になれない理由を聞き、さらに “It’s what I want. It’s what you want.” (「それがぼくが欲していることだし、君が欲していることなのだ」) と続けて言うことで、アジズに歩み寄ろうとする。

‘Why can’t we be friends now?’ said the other [Fielding], holding him affectionately. ‘It’s what I want. It’s what you want.’

But the horses didn’t want it—they swerved apart; the earth didn’t want it, sending up rocks through which riders must pass single-file; the temples, the tank, the jail, the palace, the birds, the carrion, the Guest House, that came into view as they issued from the gap and saw Mau beneath: they didn’t want it, they said in their hundred voices, ‘No, not yet,’ and the sky said, ‘No, not there.’ (289)

フィールディングの言葉にアジズは応答しない。それをするのは二人が乗っている馬である。そして “But the horses didn’t want it” (「しかし彼らが乗っている馬はそれを欲していない」) に次いで、馬だけでなく、彼らの眼下に見えるマウの町の神殿が、貯水池が、監獄が、宮殿が、空飛ぶ鳥が、腐肉が、迎賓館が、それを欲していないと続く。それらが百の声で「駄目だ。まだ駄目だ」と言い、最後に空が「駄目だ。その地上では駄目だ」と言い、フィールディングは圧倒されるのである。空は、第1章においても “The sky has settled everything” (30) (「空がすべてを決めるのである」) と出てくる、それと上記の空の記述は呼応することで、『インドへの道』は全体的に輪に結ばれた感じがする。

このような結末で、フォースターは越えがたい政治的、文化的背景を背負った者たちが一度壊れた友情を再生することの難しさをベシミスティックに描いているようだ。しかし、第3部にはフォースターがミセス・ムアの子どもラルフとステラやアジズの子どもたちを新たに登場させていることを考慮すれば、読者は次世代の新しい背景を背負う者によって、次の新しい輪の始まりを予感できないことはない。第36章には、ラルフとアジズとが出会い、アジズがラルフに “Can you always tell whether a stranger is your friend?” (280) (「見知らぬ他人が君に好意を持っているかどうか、いつでもわかりますか?」) と問い、ラルフがそれを肯定する。それにアジズは “Then you are an Oriental.” (280) (「じゃ君は東洋人だ」) と言葉を返す。この「じゃ君は東洋人だ」は第2章で彼がミセス・ムアに言った言葉と同じだった

のである。この同じ言葉の繰り返しが、ヒンズー教の輪廻転生を連想させる。ここでフォースターは真の友情の構築に向けての希望を次の世代に託しているのではないだろうか。そう考えると先述のベシミスティックな感はある。

フォースターの死後の1971年に出版される『モリス』(Maurice)を書き、彼は世に同性愛を問うた。『インドへの道』が求めたのが民族や人種を超える愛であれば、『モリス』のは性を超える愛だろう。『モリス』について、横山幸三は「その性、反道徳性、無階級性、文明の否定、自然への回帰というような彼〔フォースター〕の立場が、この作品によって、極めて明白なものになった」と言う<sup>18)</sup>。フォースターは、作品を通して様々な障がいを超えた本来的な人間の姿を一貫して描きたいという意図があったのではないだろうか。

なぜフォースターは『インドへの道』を創作したのか。その意図はいくつかあるだろう。一つは世界を支配する大英帝国の存在、帝国主義、かつ自分もその一員であることに嫌悪感を持ちながら、政治的な批判をするために『インドへの道』を創作したのではないだろうか。インドでのイギリス人とインド人との関係を観察する中で、彼は人と人とが真の友情を構築することが、この地上では不可能ではないか、とたびたび絶望感にも陥ったが、インド人の友人を介してヒンズー教を知り、日常的な現象の背後には、哲学的な神秘的傾向があることに気づき、真の友情を構築することに苦勞する人間の力の限界を承知で、この「神秘」に気づけば真の友情を構築することは可能ではないか、と世に問うために『インドへの道』を創作したのではないだろうか。

『インドへの道』を最後にフォースターは小説の筆を折った。なぜ彼はそうしたのか、という問いは、彼が後に大作家として周知されただけに、当然誰の頭にも浮かぶ疑問であろう。その理由に、田坂長次郎は「彼の性格から憶測すれば、やはり推移する『時代の波』に彼の気分がのってゆけなかったのではなからうか」<sup>19)</sup>と述べている。彼が文学界に出た頃の20世紀の始めと二つの世界大戦が終わった戦後の世界は、もはや彼の創作意欲を喚起する世界ではなくなっていたのだ。さらに田坂は「リベラリズムは影をひそめ、文明生活は向上どころか、むしろ墮落したと彼は感じているらしい」<sup>20)</sup>と述べる。こうした作家としての気分の抑圧が、彼の持っていたおおらかさで創作することを妨げたのかもしれないと推測できるかもしれない。

フォースターはこれまでの異国の者との出会いを通して、その出会いから人と人との絆は、結んだり解いたりを繰り返して深くなっていくことに気づいたのではないか。そのように考えると、彼は継続して創作する気持ちはあったが、彼のこれまでの出会いから得た気づきに感謝し、その出会いの一つ一つを思い出として大切に取っておくために、『インドへの道』以降に小説を継続して創作することを諦めたのかもしれない。

フォースターにとってのインドとは、自分がインドへ向かう前にも、インド滞在中にも、インドを離れても、個人的な様々な出会いとインドでの体験を通して、近代の帝国主義が人間同士を分かちつという解決困難な大問題に対しての制約や可能性を気づかせてくれ、精神的に成長させてくれた豊かな地だったのではないか。フォースターは、第1章全体をチャンドラポアの地理的な説明に充てている。『インドへの道』の各部の冒頭や所々にもインドの地形や自然の描写を積極的に入れている。題名にある「道」(passage)について、小野寺健は「具体的な道路ではなく、抽象的な道とか旅の意味なので、この題名は、インドにはかならずしも到達するとはかぎらない、単に到達するための一つの道の模索という意味になる」<sup>21)</sup>と述べている。フォースターは、インドへの道を往来する途中で、様々な自然や人々に触れて、自分を苛んでいた自分の内面や外面にあったものから救われたのではないだろうか。そしてイギリス人作家であるフォースターはインドを舞台にした『インドへの道』を世に出すことで、コスモポリタンの作家となり、これまでも、これからも『インドへの道』に共感する読者に、あらゆる障がいを超えて人と人とが共存しあえる希望を与えようとしたのではないだろうか。それが彼の『インドへの道』の創作の最大の意図ではないだろうか。

## 注

- 1) 瀬尾裕, 「訳者解説」 E. M. フォースター『インドへの道』, ちくま文庫, 1994, p. 539。
- 2) 長島伸一, 『大英帝国』, 講談社現代新書, 1989, pp. 83-84。
- 3) 君塚直隆, 「第4章 貴族政治の黄金時代」 木畑洋一他編『近代イギリスの歴史—16世紀から現代まで—』, ミネルヴァ書房, 2011, p. 100。
- 4) 秋田茂, 「第5章 帝国市議の時代」 木畑洋一他編, 前掲書, 2011, p. 112。
- 5) 高橋和久, 「8章 インドへの二つの道—キプリングとフォースター」 松村昌家他編『英国文化の世紀5 世界の中の英国』, 1996, 研究社出版株式会社, p. 172。
- 6) フォースターのインド人の友人はサイド・ロス・マスード (Syed Ross Masood) という。フォースターのインド訪問と『インドへの道』との関わりに関して、近藤いね子が「1913年3月24日にはアウランガバード (Aurangabad) のマスードを訪問し、『インドへの道』のフィールディングの官舎を思い出させるような宿舎に泊まる。夕食後、月光の中を近くのモスクに行く。ここでマスードともう一人の弁護士がインドにおけるイギリスの統治について話す(『インドへの道』第2章を思わせる)。27日には下痢をしていたが、夕方、マスードと馬で出掛ける。友はイギリス人に対する憤懣を爆発させ、『50年かか



るか、500年かかるか知らないが、君たちを追い出さず」と言う（『インドへの道』第37章の終わりと比較）。28日にはダウラタバード（Daulatabad）へ行き、翌日、洞窟を見物する。4月2日、ボンベイに来て、船に乗るまで、フォースターは友の経済かまわぬ客もてなし、イギリス人から見ると、全くバランスのとれていない生活態度を強く印象づけられる」と紹介してくれている。（近藤いね子、「人と生涯」近藤いね子編『20世紀英米文学案内20 フォースター』、研究社出版株式会社、1967、p. 39）

- 7) 田坂長次郎、『研究社時事英語ライブラリー 今日のイギリス文学』、研究社出版株式会社、1962、p. 4。
- 8) 荒正人、「インドへの道」近藤いね子編、前掲書、1967、p. 144。
- 9) 引用したテキストは次の版であり、（ ）の数字は、そのテキストのページ番号を表す。E. M. Forster, *A Passage to India*. (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1936)
- 10) 『インドへの道』のテキストの日本語訳は、E. M. フォースター（瀬尾裕訳）『インドへの道』（ちくま文庫、1994）を参考にした。
- 11) ヒンズー教に関して、長崎勇一は「フォースターはイスラム教徒を親友にしながら、ヒンズー教の土侯国で半歳余の王室秘書を勤めた。従って両教派の習俗に通じ、両教徒の経典の概要を心得ていたにちがいない」と言及している。（長崎勇一、『イギリス小説の思想と技法 付・日本の批評文学』、朝日出版、1976、p. 194）
- 12) 川口能久、『E. M. フォースターの小説』、英宝社、1993、p. 164。
- 13) 長崎、前掲書、1976、p. 188。
- 14) Walter Allen, *The English Novel: A Short Critical History*. (Harmondsworth: Penguin Books Ltd., 1958), p. 339。
- 15) 川口、前掲書、1993、p. 160。
- 16) 寺本明子、「E. M. フォースター：『インドへの道』—融合の模索—」『東京農大農学集報』、53巻2号、2008、p. 122。
- 17) 中橋一夫、『現代イギリス文学入門』、研究社出版株式会社、1956、p. 45。
- 18) 横山幸三、『伝統と実験—フォースターとウルフの世界』、成美堂、1988、p. 82。
- 19) 田坂、前掲書、1962、p. 21。
- 20) 同上、p. 21。
- 21) 小野寺健、『E. M. フォースターの姿勢』、みすず書房、2001、p. 253。